



# 学校図書館 司書だより

## No.26 2016年12月



### 図書館クイズ

今年、明治の文豪「夏目漱石」の没後100年めにあたります。さて、中学校の国語で取り上げられている漱石の作品は次のどれでしょうか？

- 1、草枕 2、吾輩は猫である 3、坊ちゃん

## 本と読書

### 中年の挑戦

大島 将敬

本には縁のない人生だ  
と思っていた。

幼き頃の思い出の一冊  
はあるだろうか……思い

出せない。無理もない。学校にいる以外の日光の出ている時間帯はすべて外で過ごしていた。夏休みの読書感想文は母親が書いていた。学生時代はどうか……強いて言えば武論尊作『北斗の拳 全27巻』だ。正義と友情と優しさを学んだ。ケンシロウに憧れてプロテインをのんでいた。

そんな私だが、数年前に父親になることができた。我が子のおかげでここ近年、私の暮らしが格段に色濃くなってきたように思う。

ある人に出会った。私はその人と会話がしたくて、久しぶりに二冊の本を購入した。『たったの72パターンでこんなに話せるポルトガル語会話』と『和ポ辞典』だ。今やこの二冊は片時も手放せない。この本がなければ私の世界は広がらなかった。

ある子ども達との出会いがあった。このクラスの子ども達に何を読んであげようか、悩みに悩んだ末に手にした本は、あきやま

ただし作『まめうしのおとうさん』だ。いつもどつしりと揺るぎなく構えているおとうさんの姿を伝えたくて、何度も何度も読む練習をした。

分厚い文庫本を手渡された。東野圭吾作『夢幻花』だ。読み終えたばかりとみえ、

少々興奮気味の妻に押し薦められた。しかし少しずつ読み進めるうちに妻との会話が弾み楽しい。五番目の登場人物は二番目の登場人物とどんな関係だったか？わからなくなり三十ページほど戻る。牛歩しながらでも最後のページまでたどり着いた時の達成感たるや、まるで中学生だ。生徒諸君、これは朝読にもぴった

りだ。  
ある人が教えてくれた。一冊の絵本を完成させるには、作家



のはかりしれない熱意が込められていることを。言葉、余白、色彩、紙質、装丁。創作への妥協のなさを感じた。読むうちに私の腹の底にストーリーが自然に落ちた。

くすのきしげのり作『ふくびき』という絵本がある。子どもと一緒に読んでいるうちに、はなしの中の幼子に我が子が重なり、不覚にも涙する。映画館で大作を鑑賞しているかのように心が動かされる。単純に絵本の凄さを感じる。



私にとつての読書とは、

そこには必ず人との繋がりがあふれる。自分の為だけに読もうとするのと重い腰が上がりなかつたであろう。長年の読書に対する

気持ちが徐々に変化し始めたここ数年の人と本の出会いに感謝したい。

そして、他力本願だが、私には、これからもきつと誰かが良い本を連れてきてくれるだろうという予感がある。その時の為にもつても受け皿は空けておこう。

大島さんは、年中の男の子と、小学三年生の女の子のお父さんです。古井小学校のPTA会長として、子どもたちの幸せを応援してください。

## ピプリオバトル

今年も十二月三日(土)、「子育てに本を」をテーマに子どもといっしょに読みたい本のピプリオバトル(書評合戦)を文化の森、緑のホールで開催しました。今年の発表者は中学生も入れて五人。紹介された本は「3びきのかわいいオオカミ」「ぼくを探しに」「ツナグ」「かないくん」「ミッケ」でした。参加者はいちばんどれが読みたくなったか投票し(どの本も読みたくなるのですが、なんと一冊にしぼる!)チャンプ本が決まりました。さあ、その本はどの本だったでしょう。詳しくは次号で!

# 読書タイム

市内の学校・園・施設の  
子どもと読書をのぞいてみました

今年PTAの協力により、図書館のカーテンが新しく、たんぼぼ色になりました。子どもたちがいつ図書館に入っても、やわらかい春の光に包まれているような明るい雰囲気になりました。



使い読み聞かせを行います。読み手は、選り抜いた何冊かの本を胸に抱き教室に向かいます。子どもたちは毎回楽しみにしているようで、真剣なまなざしで聞き入っています。

霧困気になりました。

## 読み聞かせボランティア 「古井人」と

古井小学校では、図書委員会が中心となり、年二回の図書館祭りをを行っています。又、図書館と高学年学級に子ども用の新聞を配布し、今日のニュースを読むことで情報読解力を養っています。そして、家庭では、親子で本に慣れ親しむことを目的とし、ふれあい読書週間の実施をしています。学校での様々な取り組みがある中、私たちも大切に行っている活動を二つ紹介します。

一つ目は、「閲覧図書」です。この取り組みは、毎年各学年のおすすめの本と小さなノートを袋に入れ、出席番号順にすべての家庭で読んでもらえるように回覧します。ノートには親も子ども自由に書き込みをもらい感想の共有をしています。今ではノートが二冊目となっています。

二つ目は、地域の方と保護者で行っている「読み聞かせ」活動です。月に一度、一学年ずつ順番に、朝の時間を

れます。笑いあり、涙あり、思わず言葉を発する子あり、いつも本当に素敵な表情をみせてくれます。物語の世界に入り込んだ子どもたちのまなざしは、とても愛おしく、読み手も感動をもらっています。「本を読んでもらった日の子どもたちはいつもより穏やかです。」と先生から伺いました。実はこの読み聞かせ活動の歴史は古く、もう二十年以上前、夏休みのプールを待つ子どもたちのために当時のお母さん方が、センドンの木の木陰で本を読んでいたことから始まっているそうです。そして今年度、ついにこの読み聞かせボランティアにネームがつきました。子どもたちに公募した結果、二百以上ものユニークで可愛い名前が集まり、その中から【古井人〜こびと〜】に決定しました。

これからも、グループの仲間がどんどん増えるとうれしいです。そして、子どもたちに素敵な本と時間をそっと手渡し続けていきたいと思っています。



「よるくま クリスマスのまえのよる」  
まえのよる 酒井 駒子作  
白泉社 1000円＋税

「サンタさんはきてくれるのかな」心配で眠れないぼく。トントンと、だれかがドアをノックして…よるくまが優しく寄り添ってくれます。ぼくの、お母さんを慕う気持ちいっぱいのクリスマスが近づくと読みたくなる絵本。子育て中のおかあさんへおすすめ。子どもへの愛があふれます。

「番ねずみのヤカチ」  
やん R・ウィルバー作  
福音館書店 1300円＋税



四ひきの子ねずみはひとり立ちする前に、母さんねずみから人間に見つからないために守らなければならない三つのことを教わります。けれどもその中の「決して大きな音をたててはいけない」ということを、大きな声をだしてしまうヤカちゃんには守ることができません。そのためピンチが！声に出して読み聞かせるにピッタリのお話です。

草で「草」中3で「草」中1で「草」  
「草」が取り上げられています。

## この本 読んでみて！



「よるくま クリスマスのまえのよる」  
まえのよる 酒井 駒子作  
白泉社 1000円＋税



「しゅるしゅるぱん」  
おおぎやなぎ ちか作  
福音館書店 1500円＋税

「しゅるしゅるぱん」とは山神様のためのおまじないだ。しかし、解人（かいた）が出会った不思議な男の子も名を「しゅるしゅるぱん」だと言う。現代と過去とを行き来しながら、静かに謎は解き明かされていく。読みごたえあるファンタジーです。



「スマホ依存の親が子どもを壊す」  
諸富祥彦著  
宝島社 1200円＋税



親のスマホ依存は本人に支障をきたすだけでなく、子どもへの影響が大きい。気づかぬうちに子どもを無視し、放置してしまう。ネグレクト…本書では、スマホ・ネグレクトにより子どもに愛着障害が起きていること、その現れ方と特徴。また、「自分も愛着障害の傾向かも」と思った大人の自分との向き合い方がやさしく書いてあります。シンガポールの小学生の作文がもとになった絵本『ママのスマホになりたい』（のぶみ著）でもわかるように、この問題は日本に限ったことではありません。あなたは大丈夫ですか？